たことがありますが、その都度先生の役人ばなれした情熱に感銘を受けたことを記憶しています。

評者の住む熊本にも、明治時代イギリス人リデル・ライト、ハンナ・ライトによって開設された救癩施設「回春病院」や、私立の「琵琶崎待労病院」の永い歴史があります。また当地には、十三の国立療養所のうち最大規模の「菊池恵楓園」があり、救癩に一生を捧げられた元園長の故宮崎松記博士をはじめ、多くの先達の御努力の跡を偲ぶこともできます。

著書の中でも特に胸を打つのは、国家の法律と政策によって、強制的に療養所に隔離収容され続け、残された家族のために名を伏せ世間の耳目を避けて生き、ひっそりと世を去っていった多くの患者さんの手記です。歌人津田治子をはじめ無名の患者さん達の、心に浸みる文章も多く採り上げられています。

本書は、時の流れに乗り遅れた政策によって、いわれのない偏見と差別を受け続けた、多くの患者さんやその肉親の苦しみを、二度と繰り返してはならないことを教えてくれるばかりではありません。わが国のハンセン病対策を正道に戻すため、勇気をもって立ち向かった多くの関係者の永く苦しい闘いの軌跡や、長期にわたる療養所生活により高齢化し社会性の低下した、残された患者さんへの生活支援対策の大切さなどを、余すところなく描いたドキュメントです。副題の「愛は打ち克ち城壁崩れ陥ちぬ」に込められた、著者の深い感慨が伝わってきます。

読み終えて心に重みを感じる本で、すがすがしい読後感を与えてくれるものとは対極をなす一冊ですが、あえて諸賢に御一読をお勧めする所以であります。

（橋本　和朋）

〔勁草書房：東京都文京区後楽二―二三―一五、☎〇三―三八一四―六八六一、一九九六年六月発行、A4判、五〇四頁、四、二〇〇円〕

二　宮　陸　雄　著
『種痘医北条諒斎　天然痘に挑む』

牛痘接種法の世界各国への伝播の歴史は、医史学の分野でもっとも中心的なテーマの一つであり、そのドラマチックな伝播の様相によっておおくの研究者の研究心をかき立てている。わが国における各地の牛痘接種の状況についても、そこに現存する史料と、そこに存在する医史学者の手によって次第に解明されている。しかしその流れを一本にまとめて、わが国の牛痘種痘史をえがこうとすると、かなりの忍耐を必要とする困難な作業となる。その困難な研究にたちむかって、五五〇頁という大著にまとめられたのが本書である。著者は本書の執筆に五年の歳月をついやしたという。それに先立つ資料調査と実地踏査に要した歳月をくわえれば、おそらく一〇年に垂んとする時間をこの仕事のためにさいたにちがいない。

本書の中心人物は下野・大田原藩医の北条諒斎である。著者は牛痘接種に情熱をかたむけた北条諒斎を日本種痘史の舞台廻しとして、江戸末期の日本での痘瘡との戦いの様相を記述している。

著者は前史としての痘瘡流行史や人痘接種法の歴史と、本来のテーマである牛痘接種法の歴史を時系列にしたがって配列し、それぞれの時点で関係した人物を浮かびあがらせるという手法をもちいた。わが国の牛痘種痘史上ではマイナーな存在である北条諒斎をえらんだことによって、従来から牛痘種痘史に名をなしていたメジャーの存在である伊東玄朴や大槻俊斎らとの接点を書きこまなければならないため、いきおい記述が煩雑になり、重複する。この点かなりの労力をついやしたのではないかと推測する。

以下各章や節を目次にしたがって目をとおすと、序章の「種痘への道は遠く」では、北条諒斎の簡単なプロフィールをえがく。第一章の「痘瘡の脅威」では、天然痘流行の恐ろしさを説き(一、痘瘡におののく)、その天然痘にたちむかった医師たちの活躍をえがく(二、痘瘡に挑む)。そして第二章「種痘の導入と成功」こそ本書のクライマックスであり、著者がもっとも力をいれたにちがいない部分であろう。はじめに北条諒斎が江戸で医学を身につける過程を描き(一、江戸で医学を学ぶ)、ついで人痘接種の危険性について言及し(二、人痘接種の危険)、それにまさる牛痘接種への手掛かりを描写する(三、牛痘接種の開眼)。そして牛痘接種への傾斜が、牛痘苗のあくなき入手をうながす(四、牛痘苗入手を志す、五、ジェンナー種痘の成功、六、ジェンナー種痘を広める、七、献身的な種痘活動)。第三章「種痘の普及」は、お玉が池種痘所の設立にはじまる牛痘法普及の歴史であるが、これに北条諒斎をからませるという手法をとっている(一、種痘所の設立、二、藩主に西洋医学を、三、戊辰内乱を越えて、四、種痘の普及に心を砕く、五、ジェンナー碑建立の志なかばに)。

折角の力作でありながら、読みすすむうちに何かしっくりしない気持が次第に頭をもたげてくるのを感じた。それが引用の部分をよんでいるときに、とくに強く感ぜられるのである。史料の引用の方法に問題があるのではないかと気がついた。

論文執筆にあたって史料をどのような体裁で引用するか、簡単なようでいながらいつも頭をひねってしまう。その論著がどのような読者層を対象にして書かれるかによって、およそその体裁はきめられようが、それだけで律しきれない場合もある。とくに本書のように一般読者を対象として、「日本語の散文としての質の高さを維持していこう」と目論んでいる著書にあっては、どこに接点をもとめるか、なかなか困難な問題であったろう。

そのようなことをあれこれ勘案しても、引用文が「現代訳」されていたり、それも一部だけに「現代訳」がくわえられたりすると、簡単に目にふれる機会がすくない折角の史料だけに残念といわざるをえない。さらにその引用文がどの書物か

ら引用されたのか、明記されていない場合もある。やはりわれわれとしては、原文でよみたいという気持ちをおさえることはできない。

もうかれこれ一五、六年前のことになるが、萩原延寿が『朝日新聞』夕刊に「遠い崖　サトウ日記抄」と題する論考を連載したことがあった。ウィリアム・ウィリスの業績なども詳しくかきこまれた読み物で、毎日心待ちにして楽しくよんだ記憶がある。その後奥山虎章についての論文をまとめるにあたっては、参考文献としておおいに利用したこともある文献でもある。新聞という一般的な媒体でありながら、引用されている文献は「候文」の文書にいたるまで、原文のままであったことが妙に記憶にのこっている。

言葉のついでにさらにいえば、これだけ学術的価値の高い本書では、やはり引用文献や参考文献の一覧と索引が必要ではないだろうか。それが付されていないためか、当然参考文献としてあげられるべき山崎佐の有名な論文「お玉が池種痘所」や、それを補完するおおくの論考が、どのようにあつかわれているのか判然としない恨みがのこる。

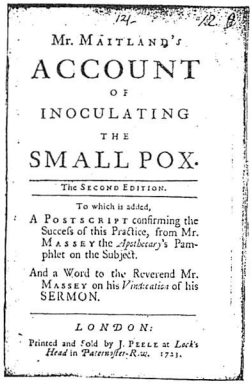
ともあれ従来通読しうる日本種痘史が存在しなかったことをおもえば、本書は日本の種痘史をかたる上でけっして見逃すことのできない論著であることはまちがいない。繁忙な開業医という職業のかたわら、このような大部の著書を完成した著者にかぎりない賛辞をおくりたい。

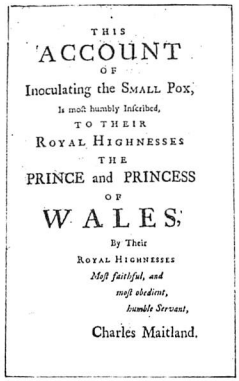
（深瀬　泰旦）

〔平河出版社：〒一〇八　東京都港区三田三―一―五、☎〇三―三四五四―四八八五、一九九七年五月二六日発行、四六判、五四九頁、本体六〇〇〇円〕

図版の追加掲載

本誌43巻2号255頁の資料、小田泰子氏著「人痘法についてのメートランドの報告」に図版（図1）が欠落していましたので、追加掲載いたします。


Mr. MAITLAND's
ACCOUNT
OF
INOCULATING
THE
SMALL POX.
The SECOND EDITION.
To which is added,
A POSTSCRIPT confirming the Success of this Practice, from Mr. MASSEY the Apothecary's Pamphlet on the Subject.
And a Word to the Reverend Mr. MASSEY on his Vindication of his SERMON.
LONDON:
Printed and Sold by J. PEELE at Lock's Head in Paternoster-Row. 1723.


THIS
ACCOUNT
OF
Inoculating the SMALL POX,
Is most humbly Inscribed,
TO THEIR
ROYAL HIGHNESSES
THE
PRINCE and PRINCESS
OF
WALES,
By Their
ROYAL HIGHNESSES
Most faithful, and
most obedient,
humble Servant,
Charles Maitland.